■修士論文概要■

東アジアにおける宝相華文様を中心とした植物文様について

■小野目依■

宝相華文様とは、八世紀前後に中国・韓国・日本の東アジアを中心として流行した花唐草の一種である。蓮華唐草や牡丹唐草といった植物文様をもとに作られた想像上の植物であり、その魅力として、花葉の華麗さや、バリエーションの豊富さなどがあげられる。荘厳豪華な空間を演出するには最適な花文様であり、そのため仏の威光を示す仏教荘厳や、華やかな生活を送る貴族の持ち物などに用いられた。数量や質の点から見ても、これらが特別に好まれていたことは明らかと言える。また文様といえばパターン的に繰り返す無機質な装飾を想像するが、宝相華は時として植物の勢いよく成長する様が表現され、溢れ出るエネルギーの本流が感じられるのである。この宝相華の描かれた空間に生命の躍動が感じられることも、魅力のひとつであると言える。

しかし宝相華文様に関する学術的な成果は、歴史や成立に関する莫大な情報量に比べて、明らかにされていることがあまりにも少ない。それは宝相華には膨大な数の類例があることや、中世から近代に至るまで長く忘れられていたことなどが理由としてあげられる。

それでは近代以降、宝相華はどのような文様として認識されるのだろうか。この問題を取り上げ研究された諸先学の資料や考察が、明治以降多数残されてきたが、現在においても、宝相華の分類に関する論及は未だ漠然としたままとなっている。特に形式による定義づけは更なる時間と資料が必要と思われ、その他にも近代以前の認識や、名称の由来についてなど課題は山済みである。それらをクリアしていくために、まず本論文において、現時点でわれわれが、何を以って宝相華と認識しているか、整理することを試みた。現在の日本美術史の中で「宝相華」と命名されているものを中心に、唐花や花唐草、団花文など、名称が広義に使用されるもの、あるいは、蓮華文や牡丹文などの一種として捉えられてきたものなど、考えるだけでもその範囲は膨大である。全てを網羅することは容易でなくまた様々な問題が生じるが、宝相華研究という雲を掴むような今後の作業において、その足掛かりの一端となるべく挑むものである。

本論文では、第一章にて宝相華文様の成立と変遷を、第二章にて宝相華文様の分類について考察した。まず、第一章の成立と変遷については、起源以前から成立していた唐草文様と蓮華の発展が重要なポイントとなってくる。両者

は古代ヨーロッパからインドを経由し、仏教伝来と共に東アジアへと伝えられたとされている。中国においても古代から唐草に酷似した動物文の利用や、蓮華と太陽を同一視する思想があったとされており、仏教伝来後の唐草と蓮華文様の利用にも影響をあたえたと考えられる。中国では敦煌石窟の壁画をはじめとした寺院での仏教荘厳に広く利用されていった。したがって、これらの文様が中国文化に深く浸透していたことが、後の宝相華文様流行のベースとなり、発展へと繋がっていったのである。次に宝相華の展開について見ると、敦煌石窟の装飾として描かれたものが、宝相華のバリエーションの豊富さに深く関わっているものと思われる。ロゼット状の光背や天井装飾、唐草による表現、地面から生えた茎の先についた花など、文様としてのみではなく、絵画的な表現のものも見られるようになっていった。また西安碑林の墓誌などに刻まれたものは繊細かつ豊麗で、敦煌のものとはまた異なる荘厳さを表すものであった。さらに人々の生活の中では、金銀器や陶器、鏡など高級ではあるが普段日常で使用されるものの中にも表されており、広く親しまれていたことがうかがえた。唐代に流行したこれらの文様は朝鮮半島や日本にも伝えられ、唐を模倣して仏教荘厳を中心に広まっていった。また日本においては奈良時代に唐より輸入された工芸品が正倉院宝物として残されている。これらの宝物は保存状態の良好で、宝相華文様を用いているものが多いため、当時の意匠を知るうえで貴重な資料となっている。平安時代に入ると、文様は徐々に和様化され、経箱などの工芸品にも好んで用いられるようになった。そして平安後期、平等院鳳凰堂の堂内装飾として描かれたものによって和様化の成立となり、以降、浄土教寺院に装飾される宝相華の手本とされていったのである。奈良・平安と時代を彩った宝相華であるが、貴族趣味の文様であったこともあり、武士中心の鎌倉時代以降から徐々に減少していった。室町時代以降はほとんど忘れ去られた文様となり、再び注目されたのは近代以降、明治に入ってからのことである。

以上が、第一章でとりあげた宝相華の変遷に関する流れである。第一章をふまえ、第二章では、明治以降に認識された宝相華文様を中心に、筆者による独自の観点で宝相華の分類を行った。分類は四つあり、花の咲き方や花弁の形などによって系統付けていった。それぞれをまとめ、類例をあげると、以下のようになる。

①ロゼット状宝相華

蓮華を基準とした俯瞰による正面からの視点。花芯を中心として放射状に花弁をつけており、唐草を用いないで表されることが多い。天蓋や塼などの装飾に多く見られる。

②伸長形宝相華

パルメットを花弁に用いた側面向きの花文。茎や蔓と共

に用いられ、パルメット唐草から派生したもの。また中空に漂うものもあり、雲気文の影響が見られる。

③牡丹形宝相華

牡丹をモチーフにし、蔓や花弁の重なり、湾曲が強調された豊麗な花弁を持つ。花芯部分に石榴や葡萄のような顆粒を持つものが多い。

④和様式宝相華

①から③の宝相華の特色を取り入れ、日本でアレンジの加えられた帰化文様。平等院鳳凰堂の装飾によって成立し、浄土教寺院装飾の典型となる。

①から③にかけては中国唐代で成立したもので、宝相華の規範となる形式である。④は唐代の影響を受けて、平安後期に日本で形成され、日本のみで使用された。以上が、宝相華を大きく系統分けした四分類である。①から③を見てもわかるように、宝相華の構成には、蓮華、パルメット、牡丹の植物文様が深く関わっており、この三種の文様には、花の形がよく見えるよう、それぞれ理想的な角度が存在する。例えば蓮華は真正面からの俯瞰、パルメットは側面、牡丹は斜め上からの見下ろしによる構図が多く用いられている（ただし、蓮華の場合は側面と斜め上からの見下ろし、牡丹は側面からの描写のものも見られる）。よって、それぞれの植物文に近い形式の宝相華にも必然的に、花文の方向や角度がある程度パターン化されていると言えるのである。

全体の構図による特徴は以上の通りであるが、内部のパーツにも宝相華独特の特徴が見られる。例をあげると、C字形、対葉花、栓形花、扇形花、房状花、屈曲花弁、雲頭花弁、花心に石榴や葡萄などの顆粒、葉と花の融合体、などといった様々なパーツから構成されていた。また花文の開花状態によって、全開、半開、蕾状のものが確認されている。

以上の分類は膨大な量の宝相華文様を構成するごく代表的な例であり、宝相華全体を網羅するには至っていないが、これによって、今まで何を以って宝相華とされてきたのかの具体的な特徴が明らかとなり、今後においても、現実花か空想花か、あるいは宝相華かそれ以外の空想花か、その区別をつける判断基準の指針となったと言えるのである。

今後も宝相華の類例を増やしていくことで今回確認できなかった形式の文様が加えられることが予想され、新たな分類基準の作成が課題とされる。また、東アジアだけでなく、より広い地域の文様形態と比較しながら研究を進め、年代・地域別による形式の分類を確立していきたいと考える。

（博士前期課程 文学研究科文化財学専攻）